

春燈

3 月号

March 2010



主宰の句

安立公彦

月光に己が身固く寒牡丹

ときざみ身刻み果つや古暦

友癒えよ冬芽挙りて天を指す

書に籠るひと日の贅や小晦日

二日はや机辺片付けゐたりけり



燈下集



○ 高嶋文清

焼芋の跳ね上げサービス棹秤
佇める少女のほつぺ河豚提灯
信濃の国歌つて下る炬燵舟
清絵のやうに咲きたる冬火花
石送り神事始の煤払

○ 石橋公代

晩節やポインセチアは緋を尽くす
冬銀河シルクロードへ発たれしや（平山画伯）
嗚呼と鳴きこの世嘆くや寒鴉
世に疎く書に耽る夫漱石忌
注連飾燈の彩きはやかに

○ 白神知恵子

舟降りて幼帝めける七五三
たわたわと渡る板橋柚子摘みに
枯萩や母への孝を省みる
言はでものくちびる寒く娘を送る
わが袖を引張り冬の薔薇散れり

○ 田嶋洋子

鈴ころがすやうに呼ばるや小六月
冬夕焼駅までの道真つ直ぐに
やさしさのあふるる個展冬薔薇
暖房車となりの人もまだ降りず
叱られてもぐりたる子の炬燵かな

○ 長谷川歌子

病む人の機嫌や人參花型に

「歲月の飛んで行きたる師走かな

一年の心放して年送る

広辞苑の重さ座右に読初め

認知症とは何と聞かるる寒玉子

○ 佐々木良玄

年の礼同姓多き過疎の村

大根干せば雪雲低く近づきぬ

冬ざれや金欄にくるまれてゐる死

人の世や葱刻む音と味噌の香と

豆まきや榊の屋号を尊びて

○ 金山雅江

冬麗や藍の彩ます仕込桶

花嫁の白き打掛冬日和

笹鳴や末寺に祀る童子仏

見上ぐれば税に家紋注連飾

戸を開けてまづは鸚哥に御慶かな

○ 伊東湘三

碧き眼の杜氏も交へし今年酒

我儘の通る嬬しみ風邪心地

付人の側にも妻子義史忌

母の夢醒めし師走のねぶた汁

なにがしの寄付を母校へ十二月

○ 太田佳代子

短日や手の甲母に似てきたる

冬波の音消す固き旅の窓

身に添ふる水の冷たさかいつぶり

手探りのひと日ひと日よ古曆

落書に見ゆる上達冬ぬくし

○ 荻野嘉代子

ざくろの絵馬揺るる小春や宮参り（鬼子母神）

明月記に会ひ冬三日月に送らるる

師走また木遣流れし父の葬

「祈りの旅路」渡りそめしや冬銀河（悼・平山郁夫氏）

買初や『ふふふふ』てふも笑へぬ書

○ 久保久子

忘れ音や天城に細き冬の月

くれないの妬心ぬぐへず冬薔薇

藪巻や風のこじれる松の幹

紙漉女とろりと水をめぐりけり

眷恋も嫉妬もゆるむ柚子湯かな

○ 廖 運 藩

大根引く晴耕雨読の及び腰

何時しかに夜のとばりや大根引

杣覆ふ霧の裳裾や大根引

大根おろし舐めて異人のしたり顔

山積みの泥付き大根路傍売り

○ 中村春宵子

枯蘆や昔運河の舟着場

極月や小雨そぼ降る義士の墓

柚子湯して融通念仏祀りけり

双清の色紙掲ぐや年用意

大年の散歩ついでの小買物

○ 渡邊泰子

蒼天に白き一と刷け冬の雲

まだ素顔知らぬ歯科医の大マスク

腑に落ちぬこと増えにけり枯野道

売り言葉買はずに山は眠りけり

お軸替へ身のひきしまる冬座敷

○ 生方義紹

軽トラの荷台の母子小春かな

ガリ版の作品集や小六月

真宗の誦経声高十二月

電飾の洩るる小窓も聖夜かな

漬菜干す白いフェンスのアラベスク

○ 久米憲子

義士の日や非常階段たしかむる

靴鳴らし師走の街を歩きけり

煤逃や敷居の高き骨董屋

冬ともし織部茶碗の影深む

胸の傷やうやく癒えし根深汁

○ 岩井泉樹

植木屋の忘れし鎌や日短

畳屋の忙しき肘の師走かな

一葉の凜々しき眉や冬至梅

数へ日や満中陰の返し物

キッチンと居間との会話年守る

○ 小倉陶女

街師走語尾に尖りのありにけり

煤迷や茶杓の銘の「大晦日」

野仏の結跏の膝や冬紅葉

寒鯉の人恋しさに振る鱗か

寒禽のきらきら声をこぼしけり

○ 荒井慈

楽の音に色変へてゆく聖樹かな

モヤイ像くつつき合うて冬ぬくし

ハチ公の片耳立てて聴くキャロル

宇宙よりバイリンガルのサンタかな

クリスマス奇跡が奇跡呼ぶことも

○ 佐渡谷秀一

それぞれの歩幅に急ぐ師走かな

冬の日のあまねくやさし花やしき

山茶花や内緒ごとせぬ妻なりき

縄跳の手首ゆつたり朝日影

音立てて冬の噴水もつれけり

○ 横田初美

来し方へ誘ふ冬の花火かな(学園前夜祭)

冬火花果て三日月に見送らる

大方は隣家の落葉掃納む

初春や今年は志野の小酒杯

利根渡る恵方詣の尾灯かな

○ 沼田桂子

小春日のミシン踏む母よみがへる

干し竿の零ドレミファ十二月

シューベルトの魔王のはこぶ流行風邪

緑十字賞たまはる去年今年

際やかに体を過ぐる寒の水

当月集

安立 公彦選



○ 棗 怜子

埋火や誰にも言へぬこと一つ

湯たんぽに揃へ置く足今日の無事

公園に雀二三羽寒の入

初夢の思ひもかけぬ人に逢ふ

贗作てふ山陽の軸鏡餅

○ 今井弘雄

年用意文字美しき仕入帳（葉記念館）

年の夜や静かに過ぐる機の里

歳月を思ひ噛みしむ晦日蕎麦

福助の座る老舗の御慶かな

鳳凰の飛び立ちにけり初御空

○ 北岸邸子

神苑の鳩一斉にたちて冬

箸すべる煮凝に透き幼き日

恙無き一卜日大事に根深汁

この町の注連飾屋も代替り

移り来て終の住処や注連飾る

○ 竹内慶子

おづおづと虎猫通ふ小春かな

奥の手は母子相伝の卵酒

風呂吹や父子の酒の黙長し

ポインセチアあふるる街のサテライト

開き直るも一計なるや年用意

○ 篠原幸子

冬麗や漱石の碑の漢詩文

露凝るやヒマラヤ杉に無数の目

草の戸は草の戸なりの注連飾

一献にいよよ華やぐ春着の子

初夢のきれいな川を渡りけり

春燈の句

安立 公彦選

生かさるることの不思議や初明り

大阪 小田 明美

撫の森冬の星座を支へをり

夕雲の日矢突き刺さる枯野かな
椰の木に結ぶ大吉初みくじ

千葉 木村みどり

玻璃拭ひ女きりりと寒の紅

追憶をたどり暮れゆく氷魚の湖

明眸の巫女より受くる破魔矢かな
読初プラン数多や空の旅

窓を射る日矢冬帝の贈物

千葉 金森 涼

永良部よりの朱欒と年を惜しみけり

人日や胡桃好みし西太后
仕舞湯の袖子の寄り来る膝小僧

三重 上野 進

寒鳥個食のランチ覗きをり

陋屋の国旗寒風を受けて立つ

寒禽の影の障子を飛び去りぬ
引き寄する枯野の厚み双眼鏡

荒野来てまたぎの宿の檜火かな

東京 米澤しげる

広き家のひとつ炬燵にかたまれり

熱燗を受くや小指までひろげ
毛糸玉纏るときの深呼吸

千葉 藤原 若菜

冬耕や鍬の拾ひし石の音

木枯の雲を払ひし星の嵩

クリスマス着信音のあかるかり
口中にラスク崩すも冬ケらら

詩心いだきて山の眠りけり

栃木 堀 正男

水底の浄土見にゆく鳩

籤引きの席を慶ぶ新年会
街の灯の幸せもどきクリスマス

東京 織田喜美子

納骨や遠ざかりゆく雪蛭

地下道を出てつきあたる年の暮



余言

安立公彦

一陽来復梯子の目より児が出入り

片桐てい女

歳時記には「一陽来復」は冬至の傍題として出ている。冬至を境に日が長くなることから、春がめぐり来る日としてこの名が付けられた。この季語には「日脚伸ぶ」に感じられる日射しの温もりよりも、もっと大きな光の恵みというような存在を感じる。

久保田万太郎全句集では、「冬至」は十二月に載せているが、「一陽来復」は一月に録している。へ一陽来復の雪となりにけり 万太郎。このことについて、編者の安住敦は触れていないが、季題別全俳句集を見ると、元日の前にこの季語のあるのは、まことに坐りがいい。

掲出句。作者は「梯子の目より児が出入り」と表わし、「一

陽来復」と子供の遊ぶ姿を取り合わせている。景を目前に見るような、活きいきとした表現だ。「一陽来復」の季語の持つイメージがしっかりと詠まれている。

短日や羽織る一枚妻に借り

松本 俊介

作者は昨年の初冬、動脈瘤治療のため、東京の大学病院に入院、検査の日々を送っている。作者との交友も三十年に及ぶ。一日も早い快癒を願うばかりだ。

この句入院中の景か。見舞に来た奥さんと話しているうちに、何となくうそ寒さを覚え、奥さんの羽織っていたものを掛けて貰うというひとこまが思い浮かぶ。こう書くとかやう小津映画の一シーンのようだ。

しかしこの何気ない動きの中に、作者と奥さんとの有り様がよく表現されている。場所を自宅に移してもこの印象は変わらない。この句はまさに春燈俳句である。

同時発表の、へ水底のことは語らずかいつぶり。の句もみごとだ。水面の鳩しか見えていない私たちにとって、水中にいる鳩は全く未知数のもの。この句の持つ内容には深いものがある。

歳晩の街の灯紡ぐ夜風かな

後藤眞由美

歳晩という季語には、年の暮より現代的な感じがある。師走も押し詰った夜景。街にはさまざまに工夫を凝らした

電飾がきらめく。折しもそれらの灯を紡ぐようにして風が吹きすぎる。

この句を唱していると、「街の灯」は作者の視界の中だけのもののように写る。そしてそれもまた紛れもなく俳句の一つの表現法である。

初鏡己の笑みを肯へり

宮沢 治子

「初鏡」という季語は清しくもあり艶やかでもある。この句、その初鏡に写る自分の顔の笑みを肯ったと言う。一読艶やかな気分にさせる句だ。しかししばらく見ているとその艶やかさは清しさに変わり、いつか笑みも消える。

それはその笑みが表現として作者によつて作られたものだからである。ただそのことを寂しさに置きかえることはない。季語をよく使いこなしている句だ。

吉原へ江戸の水路や浮寝鳥

小俣 剛哉

かつて江戸には人工自然を問わず幾筋かの水路が通っていた。その水路の一つは吉原に至り、猪牙舟が遊客を乗せて走る風景も見られた。そこには驚き身を寄せる浮寝鳥もいたであろう。

江戸学の大家と言われる西山松之助の『江戸文化誌』を見ると、吉原の廓の特色は、大勢の大名、政商、札差などが豪遊をした高級料亭であり、高級社交場であったこと、と書いてある。今（昭和六十二年）で言えば、帝国ホテルで大宴会をするようなもの、とある。

そういう文化人たちの遊びの相手をするのが太夫と言われる高級遊女だった。当然のことながら太夫には、和歌・俳諧・能楽・謡・茶・華・香・書など広い教養が求められた。しかし彼女らにも高位低位のあるのは常のこと。

吉原の最盛期は弘化三年（一八四六）、遊女の数七千人と言う。但しその頃には高級社交場の面影は失せていたのではなかるうか。

この句、私たちをしばし時代を越えた世界に呼び込んでくれる。作者の住いは浅草と聞く。

生かさるることの不思議や初明り

小田 明美

私たちが毎日を送っているということに對する根源的にも言える不思議な思い。若い頃はそういう結論の出ない問題に入り込んで悩むこともあった。生命とは何か、その命ある者の間に生ずる縁とは何か。千百年前、古今和歌集の「読人しらず」氏もこう詠んでいる。〈春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり〉作者は新年の空を仰ぎつつ、ふと「生かさるることの不思議」を思った。そういう思いを持つことも大事な句ごころの糧である。この句、ストレートな表現だけに、一句の思いはさわやかだ。（以下略）